

史談

2012 (H24) 10・25

■ 「文化財巡り」の第2回を行いました

白鷹町の置賜33観音巡りの2回目として、9月30日(日)に川西地区の観音堂を巡りました。次のようなコースでした。



- 1 高岡観音堂 (27番札所)
- 2 鮎貝観音堂 (16番札所)
- 3 深山観音堂 (8番札所)
- 昼食 のどか村
- 4 白山森33観音
- 5 高玉観音堂 (7番札所)

間に「本庄氏の墓」「伝統工芸村」「材(財)木供養塔」白鳳時代のものといわれる「円福寺聖観音像」も見学して実り多い研修になりました。

今回は、横浜の会員庄子忠宏さんも、参加してくださいました。また、会員以外の方の参加も多くありました。

その中から、上山市で仏像の修復の仕事をしている足立収一さんから感想をいただきましたので掲載します。

白鷹町史談会文化財巡りに参加して

晴天に恵まれた9月30日、白鷹町史談会主催の「置賜三十三観音白鷹町内巡り② 川西編」に参加させていただいた。高岡観音から高玉観音までの計6カ所の文化財巡りは、日頃は目にするこ

との出来ない堂内や仏像を拝観出来るまたとなない機会であり、白鷹の歴史文化の奥深さを感じ取ることの出来るとても充実したものであった。

文化財の質もさることながら、史談会の方々による解説が非常に分かり易くまた興味深いものであった。解説の中で湧いてくる素朴な質問にも丁寧に答えていただき、文化財に対する理解がより深いものとなったように感じられる。実際に文化財を見る以外にも、のどか村で美味しい昼飯を食べたり、深山焼の工房を見学したりと白鷹町の現在の魅力にも触れることが出来たのも嬉しいことであった。

大勢の人数で町の文化に触れる機会はなかなかないものである。仏像修復という仕事柄、文化財と言えば仏像への興味に偏りがちになってしまうのだが、多くの方々から様々な視点で解説いただくことで、文化財全体に対する理解や視野は大きく広がるものだという事を今回改めて感じる事が出来た。次回の文化財巡りにも是非参加したい。

町外からの急な参加であったにも関わらず快く迎えて下さった史談会の皆様、誘っていただいた宮本晶朗先輩に御礼申し上げます。ありがとうございました。

東北古典彫刻修復研究所 足立収一

■ 鷹山歴史散歩 3 竹田伊智子

(これは鷹山地区公民館の館報297号から307号に掲載されたものを再構成したものです。)

9 シンボエ

慶長5(1600年)ごろ、萩野の寺地区に「廣大寺」という寺があったと伝えられています。そしてこの寺に語りつがれた歌が「シンボエ」です。前回の石塚の地藏様は、この廣大寺の門前にあったともいわれています。

舞台は萩野から十王仏坂に向う途中の寺地区の入口。寺の跡には樁の大木があったらしいのですが、雪などで折れて、今はわずかな樁の枝が残っています。

歌の主人公の住職は物事にこだわらない活発な僧侶だったとかで、禁じられていた魚や肉も食べるし、女遊びもするという僧侶でした。そのうちに門前のおいちという娘を好きになり、寺の宝物は売り尽くし、寺はつぶれてしまい、自分も死んでしまいました。

この僧侶のことを歌にしたのが「シンボエ」という民謡で、昔からこの萩野地区で歌いつがれています。萩野小学校100周年の時は伝承文化として子ども達が歌い、踊りも披露しました。

10 五百川（いもがわ）三十三観音（針生）

昭和29年秋、1町5カ村が合併して白鷹町が誕生しました。その1年後の10月に針生は西村山郡朝日町から白鷹町に編入合併し、白鷹町の仲間となったのです。

以前の東五百川村が宮宿町、さらに朝日町となりましたが、ここ針生の観音堂は五百川村時代の五百川三十三観音の第五番札所で、他の三十二カ所は朝日町内にあるそうです。観音堂に向かって右側には朝日町に続く細い道があり、以前は主要な道路でした。

現在、針生町内は16戸ですが、女性で組織している観音講があり、毎年一月の第三日曜日に集まり、御詠歌をあげて会食をしています。最近、観音様の幕を新しく寄付されたそうです。ここの御詠歌は「いとすぢの すぐなるはりを つかふみぞ ちかいはつきじ すむぶこころを」というものでした。

11 平峰山竜徳寺

寺は鎌倉の円覚寺派で、一番北なので奥の院とよばれている。臨在宗の寺は白鷹町ではここだけ。現在の住職は米沢在住。

この竜徳寺の中には不思議な力を持った「生き地蔵」が祀られています。この地蔵様は元々、曲漆から中滝野に通じる道の側の、地蔵田という円形の五坪ばかりの田の中であって、ここは肥料もせずに稲を作ってきたところだそうです。当時、この地蔵様の前を馬に乗ったまま前を通ると、馬が暴れてどうしても人が馬から降りなければならなかったことから、誰ともなく「生き地蔵」の名を付けたと伝え

られています。

竜徳寺に移されてからも寺が留守の時に火災にあった際、何も出せなかった中で地蔵様は焦げた姿で外に出ていたとか、村の若者が枕返し否定して地蔵様に足を向けて泊ったが、朝になったら向きが逆になっていたなど、様々な話があります。病気が人のお参りすると、不治の病の場合はお灯明が早く消え、長く灯っている時は病気が長引くともいいます。

ある時は住職が「火事だ」という声に起こされたが誰もいない。気がつくときコタツが焼けて大火事寸前だったという。人々は地蔵様が住職を起こしたのだらうといったそうです。

以前の建物はとても大きく高い建物であったが、戦後、屋根替えの資金調達のために柱などを売ったので寺の左半分は空き地になってしまったとか。

門前の道路から本堂に登る階段の右には珍しい石碑が二基建っています。ひとつは明治43年、天狗連によって建てられた安達陽花の川柳碑で「さそわれりや否とは言わじ旅用意」。旅は死のことで、「用意」はしたくと読むそうです。その隣りの碑は、文政2年建立の草相撲の初代「朝嵐供養塔」で村一番の力持ちを讃え、供養した石碑です。（終）

■ 史談会と古文書研究会 菅野志郎

古文書研究会に入会させていただいたのは平成16年4月、早8年になりますが、この度、会報200号記念誌発行の予定となりました。自分でもよく継続したと思っていますが、古文書と史談は一律の関係であると考えています。実際に歴史や年代の背景が文書によって見え、理解できると思います。

古文書研究会は、最盛時には会員数が10数名を数えましたが、退会が進み、現在は5名で頑張っております。

史談会報25号で宮本晶朗氏が「塩田行屋の仏たち」という論文の中で「御沢仏」といわれる仏像群について発表なされました。いろいろと解明され、まとまられて、大変参考になり、行屋の由来、御沢仏が何故こんなにたくさん製作され、納められたの

かも解り、塩田地区も当然ながら町にとっても素晴らしい財産となることなので、大切に管理していただきたいと思いました。

祭壇正面に西国八十八ヶ所尊像が並び、弘法大師が鎮座していますが、その前机に古文書らしい一冊と古くいたんだ経文がおいてありましたので、渋谷左内氏にお願いしてお借りしました。表紙に「元三大師御鬮諸鈔」と書かれて、さらに「三月写之」とありました。「御鬮」の漢字が読めなくて、古文書辞典でも「門がまえ」で調べるが見あたらず困りました。よく調べると「とうがまえ・たたかいがまえ」の中に「亀」が入ったのが「くじ」「キュウ」「とる」と解説してあり、「御鬮」は「みくじ」と読めました。塩田行屋を訪れ、参拝の折、御鬮を引いて運勢を占ったものと解り、新しい発見でありました。

傍らに径10数センチ、長さ25センチ位の筒状の箱があり、中に棒くじが入ったものが現存しており、その当たり籤の解説書であったのです。

町内に埋もれている文書も相当発掘され解読されていますが、学ばせていただく資料はいろいろと沢山あり、これを読み下し、解明できる人材を育てて行かなければと思います。前会長江口儀雄氏、斎藤幸村先生が古文書を読める人材を育て、その火を絶やさないと努力してくださいました。

勉強ばかりでなく、研修旅行や折々の飲み会も一緒に楽しくやっています。ぜひ一人でも、二人でも古文書に関心を寄せていただき、勉強してみませんか。お待ちしております。

白鷹古文書研究会
会長 皆川清彦さん
毎月第1、第3木曜日 午後6時30分から
白鷹町中央公民館で行っています。

■ 打越のこと 守谷英一

1 はじめに

打越は昭和40(1965)年、全戸が山を下り、1戸をのぞいて貝生の野崎地区に移転し、今はなくなってしまった。

昨年、中学の同級会の席で、かつて打越に住ん

でいた仲間たちを中心にして、打越に行ってみようという話が出た。私は石造文化財の調査で、平成19(2007)年に2度ほど打越まで登っていたので案内することになった。今年になってから、6月16日(日)に打越を経由して三ッ滝へ行き、そこで素麺を食べる計画ができあがった。そこで案内するにしても下調べをする必要があると考え、6月4日に貝生の堂田から打越まで歩いてみることにした。

その結果と、その打越集落について、以前、打越に住んでいた小林義一さんに聞いた話や、『あらと百物語』に故奥村幸雄先生が書かれたことを基にして、仲間たちに打越について少し解っていることを報告しようということでまとめてみたのがこの文章である。

2 打越のはじまり

打越は天正年間(1573-1592)に、小林家の先祖がこの地に居を構えたことから始まるという。

それ以前には今川家の落ち武者の末裔である堀川家の先祖が居住していたとのことであるが、集落を形成するようになったのは、小林家の移住以降のことであるようだ。

小林家が移住するようになった経緯について、義一さんが語ってくれた。

小林家の先祖は、朝日町の浮島稲荷神社の別当寺(大行院 だいこういん 修験道の開祖役小角えんのおづぬ の直系の弟子が開いた修験道の道場である。)で修験道の修行に励んでいたが、ある時師匠と諍いをして、本尊の大日如来を背負って十王の正光院にやってきたという。その夜、大日如来が夢枕にたち、もう一山こえるように告げた。そこで、一山越えて来ると、右に葉山、左に不動尊があつて、その真ん中に煙が立っているところがあつたという。そこに居を構え、やがて子孫たちが分家をして、7軒の集落となったのが打越のはじまりという。

集落のはじまりが修験道に関わる話しになっているが、打越を含む白鷹山周囲はかつては修験道の修行場であつたのではないかと考えられる。

打越からそう遠くないところに、三ッ滝や潜り滝など修行に適した場所があったり、そこには不動尊が祀られてもいる。また、前述したように葉山神社も近くに祀られている。

だから、修験者であった小林家の先祖が打越にやってきたことも偶然ではないのかもしれない。「師匠と諍いをした」ということにも、何らかの宗教的な意味があるのかもしれない。

近代的な考えでは「不便なところ」や「辺境の地」と思われる打越も、別の視点から見ればまた違う面が現れてくるに違いない。

3 打越の生活

打越の人たちは畑や田を作る傍ら、代々山守をしていたという。しかし、山間部のことや水が不足していたことで多くの収量は見込めなかった。そこで、炭焼きが主な生業になっていた。1年で1軒100俵ほどの炭を焼いたという。

小学生の時、打越に住んでいた同級生的小林正吾君に連れられて、打越に行ったことがある。そのときのことはほとんど忘れていたのだが、集落の入口近くで炭焼き小屋を見た記憶は残っている。

打越から、山一つ越えたところに南陽市水林という山守、水守の人たちが住む集落があったが、その人たちも炭焼きをしていた。しかし、吉野川の水源を守るということで、細い木の伐採も集落内では戒めていた。そこで、炭焼きをするようになったのは江戸時代の末期になってからのことで、それほど古いことではないという。

打越の場合、山守という立場を考えてみると、炭焼きを生業にするのはそれほど古いことではないのかもしれない。

ほかに打越らしい生業としては漆掻きや石切りがある。私は確認できていないが、打越の周囲には石切場があって、この地域では有名な「貝生石」を産出していた。貝生石は、それほど風化には強くないが、この地区の古い石碑や墓石などによく使われている。

打越の周囲は、後に植林された杉がよく茂っていて、あまり広葉樹を見ることができない。だか

ら、漆の木も確認はできなかった。ただ、米沢藩では木蠟を採るために漆を「役木」とし、領主の統制下においていたことから、打越の人たちも山漆の実の採集や漆の樹液の採集に関わっていただろうことは想像できる。

その他に、燃料とする薪を積みおろすことなどの山仕事も、打越の人たちの大切な仕事であった。また、養蚕も盛んに行われ、春、夏、秋の3回で、できが良ければ7~80貫(280kgから320kg程度)の繭を採っていたと義一さんが話してくれた。(次号へ続く)

■ ミュージアムフェア やまがた2012

勤務先に「ミュージアムフェア やまがた2012」というチラシが配布されてきた。それは「東北文化の日」に協賛するイベントで10月27日(土)から11月25日(日)まで、県内の博物館や美術館で様々な催しが行われるという。

この機会に出かけてみるのはどうでしょうか。

東北文化の日協賛

ミュージアムフェア やまがた2012

Museum Fair in YAMAGATA 2012

●平成24年
10月27日(土)
~11月25日(日)

●「東北文化の日」について
東北6県及び仙台市は、東北圏域の特色ある文化資源の情報を総合的に発信し、地域文化に光りを当て、東北全体の文化力の発揮を目指すとともに、文化施設を基点として圏域内外の交流人口の拡大を図るため、10月最終土曜日とその翌日(今年は10月27日・28日)を「東北文化の日」と制定しております。
山形県では県内美術館・博物館の連携強化と活性化を図り、優れた芸術作品に数多く触れる機会を提供することを目的に取り組んでいる「やまがたアートライン推進事業」の「ミュージアムフェアやまがた2012」を「東北文化の日」協賛イベントとして実施します。

●他県の情報など詳しくはホームページをご覧ください。
東北文化の日 検索

主催: やまがたアートライン実行委員会(山形県博物館連絡協議会・山形県・山形県教育委員会・公益財団法人山形県生涯学習文化財団)
●お問合せ: 連絡先 やまがたアートライン実行委員会事務局
山形県県民文化課内 TEL: 022-630-2306 Eメール: ybank@pref.yamagata.jp

なお、東北文化の日は毎年10月最終土曜日とその翌日(今年は10月27日、28日)になっています。(守谷)